
戦乱ブラック官庁

4405

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦乱ブラック官庁

【Nコード】

N8486X

【作者名】

4405

【あらすじ】

戦火に彩られた大陸に、ある国が興った。

その名は「レート」

後に、大陸を統一し平和をもたらす国。
その過程で、大陸を蹂躪し人々を絶望へ叩き墮とす国。

そして私イエスが一兵卒としてこき使われる、最低最悪の国家だ。

プロローグ

その世界には大陸と呼べるような大陸は一つしかない。

人は誰もその大陸で生まれ、育ち、死んでいった。

いつしか人は、人生の全てを過ごすその大陸を「ライフ」と呼んでいた。

ライフは一つの大陸であり、一つの家だった。

一つの家「だった」んだ。

一つの家であり続けるには、ライフは広大過ぎた。

ある時、一つの地域が「家」ライフから独立を宣言した。

理由は単純、その地域のリーダー格だった者が「王様」になりたかっただけだ。

それから各地で独立家が乱立し、「家」ライフは氷山が水に帰すようにその形を失い、いつしか忘れられた。

「家」ライフが滅亡して五百年。

数多の独立家は、戦争に戦争を重ね、大陸は傷だらけとなっていた。

にもかかわらず、いつまでも大陸を統一するような家が現れるようなことはなかった。

強大な国家が興ることはしばしばあったが、すぐに国内で反乱が起き、複数の国家に分裂することを繰り返していた。

そんな戦火に彩られた大陸に、ある国が興った。

その名は「レート」

後に、大陸を統一し平和をもたらす国。

その過程で、大陸を蹂躪し人々を絶望へ叩き墮とす国。

そして私イエンが一兵卒としてこき使われる、最低最悪の国家だ。

〈国境防衛戦〉第1話

窓から覗ける雲一つない青空、まあなんともいい天気だ。

こんな天気のいい日に、私ことイエンは何をやっているのかといえ
ば…。

「外ばかり見て、どうしたのかな？私の話は長つたらしくて嫌かな
？」

「はい、いえ！滅相ありません！」

このキツネを彷彿とさせる人の長つたらしい話を嫌々聞かされてい
るところだった。

しかも看破されてるし。

ここはレート国^{カンカ}首都の軍事拠点^{ヘックス}、その一室だ。

私の目の前にいる人はレート国参謀総長にして、私の所属する独立^サ
作戦部隊^トの総司令代行である、カノン・パラダイムである。

任務の指示のため、私と先輩のバーレルさんはカノン代行に呼び出
された。

先ほどからカノン代行はレート国の昨今の軍事展開をこと細かに話
していた。しかし、私は学がないのでちんぷんかんぷん。隣で一緒
に聞いている先輩もいっばいっばいのように見える。

「イエンさんはすっかり飽きちゃったみたいだね。じゃあ、前置き

はこのくらいにして、本題に移ろうか。」

ただの前置きに1時間もかけられたのだとわかって、では本題はどんな濃ゆい話なのかと心底不安になる。

「北東の国境地帯がきな臭くてね、隣国の《スタグ》軍が攻めてくるんじゃないかって情報が入った。ただ正確な情報が掴めてないから、2人ともちよつと国境地帯の城塞都市^{クリング}まで行って調べてきてあーもし調査中にホントにスタグ軍が侵攻してきたら、クリングの守備兵と協力して撃退しといて。撃退したら帰ってきて報告してねよろしく。」

しかもこのキツネさんの言いつぶりだと、もうほぼ確実に敵軍侵攻してきますよね？そんな感じの情報掴んで喋ってる雰囲気ですよ？

…えーっと、つまり今回の任務を要約するとー

？クリングにて調査

？クリングにて籠城戦（国境防衛戦）（敵軍戦力不明）

うあー。

やる気がなくなっただー。

「あれ？イエンさんはどうするの？任務受けるの？やめとく？」

カノン代行はニヤニヤしながら私に尋ねてきた。

こんのキツネめえええ！先輩が受諾した任務を私が蹴れるわけないじゃんか！

「……もちろん、私もクリングにて任務を全うして参ります！」

引きつる笑顔でなんとか言い切った。

もちろんやる気はゼロだけど。

〈国境防衛戦〉第2話

「おねーさん、ひとつつください。」

「はいよー！銅貨5枚ねー！」

慣れた手つきでケースに詰められたたこ焼きと引き換えに、銅貨を5枚を渡す。

「あん？あんた見ない顔だねー旅人かい？」

「んー、そんなとこー」

「珍しいねー。最近だからこの辺りやたら物騒だから、旅人なんざ滅多に来ないんだけどねー。隣の『スタグ』領に入るのかい？」

「んにゃ、そこまでは行かないかなー。とりあえずしばらくはこの街にいるつもり。」

「そっかい、まあゆっくりしてきな！またたこ焼きも食べにおいで
「！」

「はーい、どもどもー。」

ここは、レート国北東国境地帯の城塞都市だ。
クリング
任務のため、昨日から先輩と共に滞在している。

パーカーのフードを深く被り直し、アツアツのたこ焼きを食べながら、街を警邏する。

けしてサボっているわけではない。

けして厳しい厳しい鬼先輩が都市守備隊長と軍議中だから、今うちにと逃げてきたわけではないのだ。

ちゃんと街を巡回して、怪しい奴がいなかチェックしているのだ。怪しい奴はいないのだが、時折怪しい店を発見する。そうした店は実地で調査せざるを得ないではないか。

先ほども怪しいたこ焼き屋を発見したので、調査を行ったのだ。たこ焼きは、調査資料として接收したものだ。

「…以上が貴様の言い訳ということでは相違ないな？」

はいそーです。以上が私の言い訳です。事実の隠蔽まるわかりだけど、嘘だつて貫き通せば真実になる！…よね？

「いえいえ、言い訳でなくてえ事実ですよー、事実ー」

事実だ、これは事実、事実無根なんだ。

「では言い方を変えよう、…以上が貴様の『最期の台詞』というところで相違ないな？」

「申し訳ありません！二度としません！お許しください先輩！」

先輩が腰の得物に手をかけたところで、事実の隠蔽を断念。むりでした。先輩こわいの。

この人の名はバーレルといい、今年に入隊した私の1年上の先輩だ。背が高く、色白の肌に三白眼、髪は茶髪のオールバック、左右の腰にそれぞれ一本の曲剣をさげている。

仕事に対して非常に厳しく短気で、怒るとすぐに人を斬り捨てようとする危険人物だ。

こわい。

「貴様のその言葉に何度も騙されるオレではない。やはり貴様は職務専念義務違反で斬殺するしかないな。」

「ふえっ！？って、いやいやいや、私を斬り捨てる権限なんて平の先輩に無いじゃないですか！」

《サーバント》においては、平隊員にその部下を処断する権限はなく、部隊長以上にしか認められていない。

「では本部に報告して、司令補佐官に斬殺してもらおう。」

「本ツ当それだけは勘弁して下さい！《お姉様》にかかったらマジで私斬られるだけで済みません！惨めな方の惨殺になります！」

司令補佐官・通称《お姉様》はキレイで優しいけどキレたら地上最恐なのだ。

以前ふざけて《お姉様》のお尻を触った平隊員が、公衆の面前で去勢されたのは有名な話だ。その隊員は後日変死した。

「…次に同じ行為をしたなら、すぐ司令補佐官に報告するからな？」

必死の哀願が鬼先輩に通じたらしい。
何とか一命を取り留めた。

「ありがとーございます先輩っ！愛してます！」

「愛なんて不要だ。さっさと仕事をしろ。仕事を。」

先輩に勢いよく抱きつこうとしたところ、頭を掴まれ停止させられる。

うん？仕事といえば…

「先輩、なんでこんなに軍議早く終わっただんですか？」

まあ、理由なんて想像つくけどもね。

「ああ、軍議をやってられなくなっただんでな。…スタグ軍10万、北門側に現れた。」

〈国境防衛戦〉第3話

城塞都市^{クリング}北門城壁から、外の平野部を眺める。

見晴らしはいい。

城塞都市はその名のとおり四方を城壁に囲まれた都市である。

城壁は並の砦や城などよりははるかに高く厚く強固で、およそ落城とは無縁のように見受けられる。

そんな城塞の面前に広がる無数の黒い軍勢は《スタグ》軍10万だ。オレの視界に入るのは、北の夕闇に染まる空か、軍勢で黒く染まる平野かのどちらかだと言えるぐらいだろう。

「そいで先輩、私は何をしましょーか？」

オレの隣で話かけてくるのは、オレの、…今年できた初めての後輩。名前はイエンと言う。

見た目は14〜16歳ぐらいの小柄でどこか中性的な印象を持つ少女だ。

この大陸に数人しかいないと言われる、非常に珍しくも不吉とされる『黒髪』を、いつも帽子やフードで隠している。

放浪の旅に出ている《サーバント》総司令の紹介により入隊したらしいが、詳しい出自はよく知らない。

任務に対するやる気のアップダウンが激しく、その都度注意しているのだがなかなか直そうとしない。

それでも腕は立つため、そのことに関して（だけ）は認めている。

さて、それは置いておいて、これからの方針を決めて指示しなければならぬのだが…。

「敵は今到着したばかりだ。もう数時間で日も暮れるため、開戦は明日になるだろう。貴様は明日からオレの指示で散々動きまわってもらおう。さしあたって今日貴様がすることは無い。」

遠征軍が夜に城塞を攻撃するということは普通は考えられない。

夜の闇の中、敵兵が見えない中での攻城戦は避けるべきというのは、軍法において一般的だろう。

開戦は明日。

援軍要請はつい先ほど本国へ出した。

あとは一週間もここを防衛すれば援軍が到着、守備隊と共に敵軍を挟撃して撃退、といったところだろう。

難しい任務ではない。

「……うーんと、指示はわかったんですけど、1つ質問が。敵軍が今突然動いてきたらどうしますか？」

「間もなく夜だというのに、城塞を攻撃するのは下策だ。普通はあり得ん。」

「ん、じゃああの敵軍は普通じゃないんですね。」

「……………?」

何を言ってるんだこいつはと思ったが、ふと面前に目をやると…

- かアかれエエエエツ!!

- ウオオオオオオオ!!

- 殺せエエエエツ!!!

- オラアアアア!!

敵軍は動き出した。

《スタグ》軍は、雲霞のごとく城塞へ押し寄せた。

10万の大軍が地を駆けることにより、城塞が大きく揺れていることがわかる。

何を間違えたか、オレの予想は大きく外れた。

これからどうすればいいか、全く頭の中で整理が追いつかない。

オレはこの奇襲により、完全に混乱していた。

肩を後ろから軽く叩かれて、オレはようやく我に返った。目が覚めるように後ろを振り返ったオレに対し、イェンは苦笑しながら言った。

「まあ、私たちは一兵卒じゃないですか。軍の動きを考えるより前線で戦うことの方が向いてますよ。」

そう言うとイェンは両手のグローブを締め直し始めた。

確かに、イェンの言うとおりだった。

守備隊の指揮権を委譲され、將軍気取りで何でもできると思っていたオレは間違っていた。

オレは一兵卒だ。

《サーバント》の隊員は、戦術を用いる必要などない。

目の前の敵を殺す。

戦場ではただそのことだけ考えていればいい。

自分の仕事は何なのかを思い出したオレは、笑顔で守備隊長を呼び出した。

「お、お呼びでしょうか！臨時司令官殿！」

「指揮権は貴殿にお返しする。好きにやってくれ。」

「えっ、は、はい！拝命いたします！」

守備隊長は突然の申し出に戸惑った風であったが、今が非常時だと認識したのだろう。すぐに引き受けた。

「では、臨時司令官殿はどうされるのでありますか？」

「オレかい？オレはなあ……」

守備隊長の質問に対し、にやけ顔をこらえきれず、言ってやった。

「好きに、殺ってくるよ」

《国境防衛戦》第4話

「まったく、この先輩は……。さっきまではムツツリしてたりオロオロしてたり、それはそれでだらしなかつたんだけど、今はニヤニヤと緊張感の無い顔してるし。まーいつものことだけど。やっぱりこの人根っからの戦闘狂だよ。こわいなあ。」

「ふふつ、聞こえてるぞ。」

眼前の大軍を前にニヤケ面を晒しているバーレルを横目に、イエンはやや呆れ気味である。

眼前。

そう、眼前だ。

イエンとバーレルの2人は、先ほどまでいた城壁の上から降りて、北門の外にいた。たった2人で、である。

10万の大軍を前にして、自殺行為ともとれるこんな真似をした理由は単純明快。

「今わかった。籠城戦なんて趣味じゃないし、オレに向いてない。迎撃戦をしよう。」

バーレルはそう言うと、北門の城壁から飛び降りた。バーレルはやりたいことをやりたいようにやるため、城塞から出撃した。

恐らくこんな流れになるだろうと考えていたイエンも、渋々バールに追従して城壁を飛び降りた。

城壁の高さは25mほどある。

普通の人間がこの高さから飛び降りると、良くて両足骨折、大体は全身を強く打って即死であろう。

しかし、2人は難なく軽々と着地した。

別段体に異常があるようにも見えない。

その様子を見ていた守備隊は度肝を抜かれた。

独立作戦部隊サイバントに所属する隊員は、入隊の際にある薬品を投与される。

《身体超化薬4405番》

投与された人間の細胞を変質させ、常人を遥かに超越した身体能力を発揮させる薬。

だが、多くの副作用を持つ薬でもある。

? 身体に適合しなければ即死する。

? 適量以上を投与すれば即死する。

? 体組織に異常が起こり、体の部位が弾け飛んだり増えたりする可能性がある。

? 性格を変質させる。

《サーバント》の入隊試験は、極端な話ではあるが、投薬に耐えられるか否かの試験なのである。

バーレルはこの試験をパスし、つまり投薬に耐え、今現在に至る。いくつかの副作用はあったが。

対してイエンはそもそも投薬を受けてはいないが、《サーバント》の隊員となった。その理由についてはいずれ触れることになるだろう。

話は戻る。

バーレルとイエンは敵軍を眼前に、たった2人で迎撃せんとしていた。

しかし、いくら《サーバント》の隊員＝超人といっても限度というものがある。

たった2人で、10万人全てを相手にすることは不可能。単純に手が足りないのだ。

では、たった2人で何ができるのか。

その答えは…

「後輩、賭をしよう。あの巨大な旗の下にいる一番偉そうなオッサンの首を先にとってきた方の勝ち。勝った方は、負けた方を『サボっていた』と司令補佐官に報告する。先輩の言うことは絶対。拒否権なし。以上、わかれ。じゃあな。」

「は、え、ちよっ」

イエンが返事をする前に、バーレルは飛び出していった。
しかも賭の内容は最悪だ。

先輩に負けたら、『お姉様』に惨殺される。

突然負けられない戦いが発生した。

「…しよーがない、頑張らせていただきますよ、せんぱ…い！つと。

」

独り言を言い切る前に槍を向けてきた敵兵の顔面を、前から蹴りつぶす。イエンの右足は脳髓までめり込み、敵兵は即死した。

《国境防衛戦》第5話

私は《スタグ》軍の將軍をやつてかれこれ10年になる。戦績はそこそこ。

強くもなく、弱くもない。

それでも、敵軍よりも大軍を率いていけば負けない。それが私だ。

10年間將軍をやっているが、《レート》国へ侵攻したのは今回が初めてだ。

《スタグ》軍大將軍にして、今回の侵攻の総司令官であるブーチ殿曰わく、

「《レート》建国以後、一度も我が《スタグ》と《レート》は武力衝突していない。《レート》の首脳は油断しきっているだろう。今こそ《レート》を征服し、《スタグ》が大陸中央へ進出する足掛かりとする。」

などと語り、勇んで出陣したのであった。

ブーチ殿に付き従つた私には、一抹の不安があつた。

我が軍がこれほど大規模な軍を動かしているにも関わらず、《レート》が国境防衛のための軍を出したという情報は入つてこなかったからだ。

別段、今回の侵攻において、情報統制などは行っていない。出兵の情報は《レート》首脳にもすぐ伝わっているはず。

だが何故敵は動いていない？

不安はあったが、その不安を払拭できる方法も思いつかなかった。

そして今。

我が軍は敵の城塞都市クリンケを攻撃中である。

時間は夕方。

本来であれば攻撃を開始するには適さない時間帯ではあるが、ブーチ殿の方針により、奇襲という形で攻撃が開始された。

この規模の城塞都市を攻略するとなると、相応の時間と兵力が必要だと思われるが、ブーチ殿はそこまで考えているのだろうか。

大將軍の方針に疑問を感じていた時、ふと、前方の兵の動きに違和感を感じた。

兵達のだ真ん中で、何かが暴れているような。

「報告します！我が中央前軍の先鋒隊は壊滅状態！敵は中央前軍本陣へ向かってきます！」

「敵の兵数は？」

「そ、それが……！一人！一名です！」

「……………は？」

どつという事態だそれは。

1人？そんなわけないだろ。

「何を混乱している。1人で我が軍の先鋒を壊滅できるわけがないだろう。もっとよく確認し

- ぱしゅっ ぼとっ

乾いた音がした。

何かが落ちた音がした。

視界が90度ズレて地面につながる。

何かが起きたのはわかった。

具体的に何が起きたかはわからなかった。

名を名乗る間もなく、名も無き將軍はバーレルに背後から首を刈り取られたのだった。

「こいつは前線の將軍か、間違えた。総大将はこいつではないな。」

「きっさまアアア！」

思案中のバーレルに將軍の近衛兵が殺到する。

バーレルは左右の曲剣を、体の前でハサミのように重ね合わせる。

これがバーレルの構え。

近づく近衛兵の首を、ハサミでトマトを切り取り収穫するように1人ずつ刈り取っていく。

ぱしゅっ
ぱしゅっ
ぱしゅっ
ぱしゅっ
ぱしゅっ
ぱしゅっぱしゅっぱしゅっぱしゅっぱしゅっぱしゅっぱしゅっ
ぱしゅっぱしゅっぱしゅっぱしゅっぱしゅっ

バールに襲いかかってきた者は全員首を刈り取られ、それ以外は逃げ出した。

「…遊んでたら方角わからなくなってきたな。」

後輩のやる気を出させるための賭とはいえ、負けると先輩としての沽券に関わる。

まずはともかく、敵兵が多そうな方へ向かってみよう。

バールは血にまみれた体の特に気にもかけず、獲物を探して戦場を徘徊するのであった。

《国境防衛戦》第6話

「先輩はあつちか。相変わらずの方向音痴だなー。どこにいるか分かんなくなったら私みたいに高いところに登ればいいのに。ねー？」

ねー？と私の足下で椅子に腰掛けたまま絶命している奴に話しかけてみたり。

「

「無視か！傷ついた！」

もともと足蹴にしていた頭を、さらに2回ジャンプして踏みつける。

この旧人間脚立は、こちら辺の軍の将だったんだと思う。

何か偉そうだったし。

蹴りつぶしたら周りが混乱してる感じだったから。

まあ今は私の踏み台だけ。

「さまよう鬼先輩はほつといてー、敵の大将はー、あー…そこだなー」

周りを見渡して、それらしい部隊を発見。

小高い丘に陣取って、それでいて何重もの防御陣。

てんつけー的な「兵士ども、オレのために働け」つつう感じのデブ將軍さまタイプと見た。

……

デブ將軍…出不精くん…

くふふ…って、ヤバイヤバイ。

早く行かないと。

さまよう鬼先輩に先越されちゃうよ。

イエンは少し慌てて駆け出した。

《スタグ軍》本陣の大天幕の中では、小太りの男が貧乏揺すりをしながら爪を噛んでいた。

にきびだらけの顔には、焦りの色が浮かんでいた。

「城はもう落ちたか!?!」

「まだ攻撃が始まったばかりです。まして、あのような規模の城塞は、1日で落ちるようなものではありません。」

質問を投げかけたのは、小太りの男。

大將軍ブーチ。

対して答えた銀髪の男はその参謀長、ヴィンセントだ。

「ッ！城に潜り込ませていた者たちはどうした!」

「昨日から連絡が取れません。恐らく始末されたのです。」

「…使えん！使えん使えん！なぜどいつもこいつも私の思い通りに動かんのだ！クズめ！」

自分のことを棚に上げてよく言ったものだ。
グインセントは内心うんざりしていた。

世襲による、名ばかりの大將軍であるブーチは、軍を率いること自体が初めて。

机上の空論をならべて国王から兵を与えられたはいいが、グインセントから見れば、新しい玩具を買ってもらった子どものような調子の乗りよう。

見ていると吐き気がする。

それでも、参謀長として献策し続けなければならない。

「大將軍、夜になっては攻撃ができません。一度引き上げましょう。」

「私は後退などしない！落城するまで攻撃の手を緩めるな！松明を持ってば夜でも戦闘可能であろうが！」

「しかし…」

「私に指図するな！」

こつも話が通じないので、どうしようもない。

戦況は、城兵が出撃するぐらいの変化がなければ、進展を見ないだろう。

ヴィンセントが嘆いていたところで、慌てた様子の伝令兵がやって来た。

「申し上げます！」

「なんだ！」

「コウ将軍が戦死なされました！将軍が率いていた中央前軍は壊乱！敗走しています！」

「なアにイ！？どういうことだ！城兵が出て来たのか！？」

「詳細は不明です！」

「っ…」

ブーチは見る見る真っ赤になっていった。
ぶつぶつと「使えん使えん」と漏らしていた。

伝令兵が報告を終え、下がったのと入れ替わりに、小柄な伝令兵がやって来た。

「申し上げます！」

「っ…またか。今度はどうしたんだ。」

「ダイコク將軍討ち死に！將軍が率いていた右軍は今も混乱しております！」

「なん…だと…？」

つい先ほどまで真っ赤だったブーチの顔色は蒼白となった。

どうなっている、私の知らない兵力が敵にはあったのか？

《スタグ》軍10万の総大将の頭は理解不能なことだらけで真っ白だった。

対して、ヴィンセントは深く思索していた。

奇襲部隊を近隣に配置していたのか？

だが、潜伏する場所などないはず…。

「では、失礼します。」

報告を終えた小柄で黒髪の伝令兵は大天幕から出ようとした。

「…待ってッ！」

しかし、ヴィンセントに制止されたのだった。

《国境防衛戦》第7話

ヴィンセントは伝令兵の不審な点に気付いた。

「その兜の下、《黒髪》だな？ずいぶん珍しいじゃないか。」

「……………はい」

伝令兵は振り返らない。

「我が軍に《黒髪》の兵がいたとはな。それは不吉だ。」

この大陸に住む人間の髪色は、最も多い色で赤茶色、次いで金色、後は赤毛など。

ヴィンセントのような銀髪の者はごく少数だが、それでも《黒髪》ほどではない。

今大陸で生きている人間の中で《黒髪》の人間は、数人しかいないといわれている。

迫害されて滅ったからだ。

博識なヴィンセントも、《黒髪》が不吉とされる経緯は知らない。

だがこれだけは言える。

この、全く見覚えのない伝令兵は、不吉を運んできたということだ。

ブーチはヴィンセントが何故こんなことを言っているのかわからずキョトンとしていた。

すると、伝令兵がこちらに振り返った。

「……はあ、せっかくこんなカツコしてまで潜り込んだのに、ばれちった。」

イエンは兜を投げ捨てた。

全く聞き覚えのない女声。《スタグ》軍に女の伝令兵などいない。さすがのブーチもこの事実に気づいた。

「な、何者だ貴様ア！」

「こんばんは、曲者です。はじめまして出不精くん。首ひとつください。」

「え、衛兵！」

- ウワアアアアア!!

- ギャアアアアアア!!

ブーチが衛兵を呼ぶより、わすがに早く、大天幕の外から兵士の悲鳴が上がった。

「な、なん、何事だ!？」

「さまよう鬼さんがこちらに着いたみたいだよ。あの人は自分に向かってくる敵みんな斬り捨てちゃうからね!。衛兵さんもそっちに集中するだろうね。」

「なんなんだ、なんなんだよお前はアツ!？」

ブーチは完全に冷静さを失っていた。高血圧で勝手に死にそうなほど。

そんなブーチの様子を見て内心爆笑のイエンは、任務を果たそうと腰の小太刀を抜き放つ。

ーリイイイン

鈴が鳴るような鞘走りの音を響かせ、小太刀を逆手に構える。

「ひ、ひいひい!」

尻餅をついたブーチは、この場を切り抜ける方法も考えられずに、ブタのように怯えるだけであった。

対してイエンは「悲鳴は『ブヒイイイ』じゃないのかと、期待が外

れ少々がっかりしていた。

「いや、出不精くんの百面相はもう堪能した。後は首をもらうだけだよ。」

「……………待て。」

先ほどまで沈黙していたヴィンセントは、腰のレイピアを抜きブーチをかばうように立ちはだかった。

「何のつもりですか、鋭い軍師さん？主従愛ですか？BLですか？」

「この方は我が《スタグ》軍の総大将なのだ。そう易々と討たれるわけにはいかない。」

易々じゃなきゃ討つていいのかなとイエンは内心思ったが、そんなわきゃないかと自己解決した。

「ブーチ殿、お逃げ下さい。ここは私が食い止めます。」

「うわ、すごいベタな死亡フラグ立てたよこの人。」

ブーチは悲鳴を漏らし、足をもつれさせながら大天幕から逃げ出した。

イエンはその様子をにやにやしながら眺めていた。

「……なぜ少しも追おうとしなかった？」

「んー、あなたを瞬殺してから徒歩で追っても余裕で追いつくからですよ？」

「はは…、言ってくるよクソガキ。ガキの揚げ足をとるつもりはないが、…死ぬのはお前だ。」

《国境防衛戦》第8話

「お前、さては《サーバント》だな？」

「ふえ！？ち、違いますよ？私はただの諜報部隊です！」

まるわかりだ。

やはり《サーバント》か。

《レート》の暗部。

モルモット部隊。

食人鬼の巣。

20年前終結した《レート独立戦争》を勝利に導いた大陸最強の部隊だ。

特殊な薬品を投与することで身体能力を高めているらしいが、果たして効果はどの程度なのだろうか。

目の前の少女は、小柄で線が細い。

そこまで身体能力が高いようには見えない。

…諜報部隊と自分で言っているのは事実かもしれないな。

《サーバント》の諜報部、その暗殺者、といったところか。

恐らく將軍のうち1人は、この少女が隙を突いて殺したのだろう。

ならば、正面からの戦闘は不得手なのではないかな？

よし…

「かの有名な《サーバント》と剣を交えることになるうとは、ついでいるのかいないのかわからんね。」

「だから、《サーバント》じゃないんですよって!」

「まあ、《サーバント》だろうとそうでなかるうと、ここで死ぬことは変わらないな!」

刹那、三步の間合いを一步で詰め、勢いそのままイエンの心臓を狙い突く。

およそ常人に避けられる一撃ではない。

ヴィンセントはレイピアの達人であった。

しかしレイピアがイエンの胸に届くことはなかった。

ヴィンセントが三步の間合いを一步で詰めた瞬間。

ヴィンセントの顔面があるべき位置に、イエンは右足を叩きこんだ。結果、間合いを詰めたはずのヴィンセントは、顔面に自分自身の勢いを加えた右ハイキックを受け、脳髓を破壊されその場に沈んだ。

「遅っ。弱っ。」

ヴィンセントの判断は、全て間違っていた。

《サーバント》と知ってなおイエンと戦ったこと。

《サーバント》は人間風情がまともに戦える生物ではない。

イエンを諜報部の暗殺者だと決めつけてしまったこと。

《サーバント》に諜報部は存在しないし必要もない。

ブーチをかばって逃がしてしまったこと。

かばわなければ死ぬこともなかったかもしれないのに。

《レート》へ侵略してきてしまったこと。

本国に残っていれば、死ぬこともなかっただろうに。

- ワアアアアア！

- 困めー！困んで矢を放てー！

鬼先輩の方はずいぶん盛り上がってるな。

兵隊が逃げないのか。

あー、そっか、守るべき本陣だから、逃げるわけにはいかないのか。守るべき御大将はここからさっさと逃げてるのになー。

「さてと、追っかけますか。」

イエンは走りだす。

《サーバント》は、当然ながら走るスピードも常人よりはるかに速い。

だが、そんな中でもイエンは、次元が違う。

バーレルが100mを全力疾走したとして、4秒はかかる。

対してイエンは流しても2秒かからない。

現在の《サーバント》の中でトップクラスのスピードを誇るイエンは、軽い散歩気分でブーチを追いかけた。

《国境防衛戦》第9話

なぜ、ボクは逃げているんだろう。

大軍を従えて、この国を蹂躪するはずだったのに。

なぜ、今ボクは1人なんだろうか。

わからない。

わからない、わからない。

日が暮れ、夜の帷の中を白馬が疾走する。

白馬に必死でしがみついた男は、眉目秀麗、であるはずもなく、ブタに似た醜男だった。

ブーチは単騎ながらなんとか、《レート》と《スタグ》の国境までたどり着いた。

10万の兵、数多の将を戦場に取り残し、おめおめと逃げてここまで来た。

《スタグ》に入りさえすれば安全だ。

あの少女も《スタグ》領までは追ってこない。

安心感に浸ったブーチは、《スタグ》へ入ろうとしていた。だがその時、一つの疑問が湧いた。

「…このまま帰って、私は国王に許されるだろうか。」

許されるはずがない。

たった1人で逃げ帰った大將軍を待つのは、断頭台だけだ。

「死ぬのだけは嫌だ。」

何かいい方法はないか…。

…ん、そうだ。

私を殺そうとしていたあの少女は、参謀長によって倒されたかもしれないではないか。

それに本陣には2万の兵がいる。

たった数人で侵入したところですぐに全滅するだろう。

なんだ、必死に逃げる必要などなかった。

部下を信じて、泰然と構えていれば良かったんだ。

「よし、戻ろう。」

本国へ逃げ帰るのではなく、再び戦場へ行く。

私はまだ負けたわけではないのだ。

決意し、馬を戦場へ向けようと振り向いたところで、ブーチはこの決断を後悔することとなった。

「ありゃ？戦場に戻るのかな？じゃあわざわざ追っかけなくて良か

「ったんだねー。無駄に疲れちゃったよ。」

振り返りそこにいたのは、今最も会いたくなかった少女だ。

体から力が抜けていく。

参謀長は、足止めにもならなかったのか。

「そんなやる気のない顔を見ると、こっちもやる気なくなるよー。
ねー白馬さん？」

そう言うと、少女は私のまたがる馬の顔を優しい手つきで撫でた。
その手つきを見ていて、ブーチに新たな考えが生まれた。

…この少女だけなら、私1人でもなんとかならないだろうか。

見当違いも甚だしいが、ブーチはもはやまともな思考など持ち合わせ
せていなかった。

そしてそんなブーチの妄想は、やはり一瞬で裏切られた。

…ガゴンッ！

突然白馬がバランスを崩し、地面に倒れ込んだ。
同時にブーチも地面に投げ出された。

「ぐっ…、な、にが…」

「えっと、待ってても白馬さんから下りてくれなそうだったから、白馬さんの前足にローキック入れて転がしてみたの。」

信じられないことをする少女だと思いゾツとしたが、白馬の足を見てさらに体が凍りつく。

両方の前足が完全に、もげている。

どんな蹴り方をすればこんなことになるのか、想像できないししたくもない。

「さて、覚悟はいいかな？」

少女は再び小太刀を抜き放ち、私の首に向けた。

…駄目だ死にたくない。

嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ。

死にたくない！

「待て！待ってくれ！娘だ！娘がいるんだ！ちょうどキミと同年ぐらいの！私が死んだら1人ぼっちになってしまっんだ！」

一世一代の土下座だ。

我ながらかなりベタな命乞いだが、あきらめるより何十倍もましだ。

「ふーん。」

当の少女は思案顔。

まさか、通じたのか？

私の命乞いが！

「…私も戦争で父さんや母さんを殺されたし、お姉ちゃんも失った。その思いをその娘もするのかな？」

これは、手応えありだ！

存在しない娘よ、感謝する！

「ああ、君は家族を戦火で失っているのか、かわいそうに。私はね、君と同じ思いを私の娘にはさせたくないんだ。ここはひとつ、見逃してはもらえないだろうか。」

…

静寂。

「……よ。」

「え？」

何と言ったか聞き取れなかったので、聞き返そうと少女の顔を見上げた。

そして戦慄した。

「私と同じ辛い思いを、あなたの娘にもさせる。…ふふふ、こんなに素敵なこと、他にないよ。あなたの娘の不幸の分だけ私は幸せになれるんだ。」

…ばしゅっ

ブーチが最期に見たその顔は、歪んだ笑みを浮かべていた。

《国境防衛戦》第10話

窓から覗ける雲一つない青空、まあなんともいい天気だ。

こんな天気のいい日に、私ことイエンは何をやっているのかといえ
ば…という切り出しは前にもやったつげ。

ここは《サーバント》の本拠、ヘックス軍事拠点、そのエントランスホール
だ。

私は《サーバント》の隊員なのだから、ホールにいること自体は普
通だ。

問題は私と先輩のバーレルが、このエントランスホールのと真ん中
で正座をしているということ。

なぜこんなことになったのだろうか。

《スタグ》軍は、総大将以下数名の將軍を失い、残った將兵は本国
へ撤退した。

これでカノン代行から命じられた任務は達成。

カノン代行に今回の任務内容を復命し、仕事は終わった。

そう、『仕事は』終わった。

先輩と私は今回の任務の中で、一つの賭をした。

要は敵総大将の首をとってきた方の勝ち。勝った方は負けた方が『
サボっていた』と《お姉様》に報告する、というもの。

そして私は賭に負けた。

敵総大将をあと一步まで追い詰めた時、余裕の私は相手とくだらない話をしてしまった。

おかげで、さあ殺ろうと思った瞬間に、先輩にぱしゅっと横取りされてしまった。

以後、《ヘックス》に帰るまでの一週間程は、先輩にひたすら悪態をついてきた。

そして、カノン代行への任務完了の報告が終わり、次に向かうのは……

《司令補佐官室》

「…先輩、ねえ、先輩…やめましょうホント、許して、お願いします、…ひぐっ…、お願いしあす…、許ひてくらさい…」

「あーやかましい見苦しい。覚悟を決める。どうせお前がサボったことは最初から報告するつもりだったんだ。」

「…おにー、…ひぐっ…、ばかー」

・コンコンコンコン

「どうぞー」

「失礼します。」

「……しつねーします。」

目の前の席に座っているのは、才色兼備という言葉をそのまま人間にしたような金髪メガネの超美人。

《お姉様》リミ・エンド。

《サーバント》の現No.2にして、地上最恐の女性。

《サーバント》の隊員は、任務から帰還したときは、必ず《お姉様》に報告しなければならないという鉄の掟がある。

決めたのは《お姉様》だ。

「バーレル・バルト、任務より帰還いたしました。」

「イエン・ヒモト、きかんしました。」

「はい2人ともおかえりーって、イエンちゃんはなきべそでどーしたの？ほらこっち来なさい。鼻ちーんしたげるから。」

呼ばれるままに《お姉様》に近寄ると、軽く抱え上げられた。要は抱っこされたのだ。

《お姉様》の身長は190cmある。
160cmもない私を抱っこしたとしても違和感はなく、遠目には
親子のように見えなくもないらしい。
子どもに見られるのは不本意だが。

「はい、ちーん。」

「ちーん、ぐしゅぐしゅ。」

「はい、すつきりしたねー。それでイエンちゃんどーしたの？その
先輩にいじめられちゃった？」

.....よし

「いじめられました。」

「えー!？」

「私許して下さいって何度も言ったんです。でも、全然聞いてくれ
なくて、嫌がる私を無理やり...ぐすっ...」

「...へエ、バーレル君？どついうことかなア...?」

《お姉様》の言葉に強烈な殺気が宿る。

「ひっ…いえ！ち、違うんです！」

「…私の可愛い可愛い妹たちに淫らな行為をした者は、階級問わず処断することになってるよねエ…？」

この決まりも《お姉様》が作ったものだ。

「だから、違うんですって！オレはイエンが今回の任務中にサボったことを報告しようとしてただけです！」

「……………あら、『また』サボタージュしてたんだ。イエンちゃん…？」

殺気が私に向けられた。

……………よし、逃げよう。

アレ、逃げ、れない…

そんな、ガッチリホールドしないで、優しく抱っこしてください《お姉様》…

「…逃ーげーらーれーなーいーぞー…？」

《国境防衛戦》 エピローグ

「…はい、サボってたこ焼き食べてました。ごめんなさい…。」

現在土下座中。

覚悟を決めて白状することにした。
どうとでもなれ。

「この間、『もうしない』って言ってたよねえ。私、信じてたんだけど、裏切られちゃったなあ。」

「《お姉様》の信頼を裏切ってしまった、本当に申し訳ありません…。」

自然と涙目になる。怒鳴られてるわけじゃないのにどうしてなんだろっ。

「…はあ、もういいや。イエンちゃんは反省してるみたいだしね。

…おしおきは後で決めておくからね。」

おしおき確定

嫌だ、嫌だ嫌嫌嫌嫌。

おしおき嫌だ。

「…本務から外れた行動を取れるほど、バーレル君は偉くなったのかしらア？」

「……いえ……。」

「…私に何か言うことは無いのかなア…？」

「す、すみません！調子に乗ってすみませんでした！」

直立姿勢から両足の骨が折れたように一瞬で土下座した先輩。

「君もおしおきだね。」

「ぐっ！」

作戦成功。

これで、上手くいけばおしおきは半々で軽くなるはず。
死ぬことは免れるかも。

「うーん、じゃあ、バーレル君は、今日1日エントランスホールで正座ね。あ、首にこれかけてね。」

『私は可愛い後輩の前でかっこいいとこ見せたくて、將軍気取りで軍隊を指揮しようと思いました。』

これは恥ずかしい。
その上誤解されそーだ。

「……………わかりました。」

おお、先輩素直に応じた！
けど泣きそつだ。

次は私の番か…

「うーん、イエンちゃんは、バーレル君より罪が重いからなー、ど
ーするかな。」

やっぱり嫌だ。
おしおき嫌。
嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌だ。

「じゃあねー、バーレル君と同じことするか、私に『開発』される
か、どっちがいい？」

「先輩と同じことします。」

我ながらすごい速さの即答だった。

「えー…、『開発』にしといて先輩と同じことします！」

「もう、わかったよ…。」

《お姉様》は不満げだが、自分の貞操は大事にしたい。

そして今現在の正座に至るわけであった。

私の首には、

『たこ焼きチャイドル

おやつを与えないように』

と書かれた大きなカードが下げられている。

隣の先輩は無言。

たまに来る他の先輩に目の前で爆笑されてたりする。

私はと言えば、女の先輩に頭を撫でられたり、抱きつかれたり、ほつぺをぺるぺるされたりしていた。

任務が終わって、1日正座。

それで明日からまた新しい任務の予定なのだから、まったく泣けてくる。

たまには休みが欲しいけど、忙しい《サーバント》はそもいかな

いらしい。

サボったら正座だし。

私ことイエンは、今日もお国にこき使われ中でした。

〈おっとり捜査〉第1話（前書き）

第2章です。

今回からキャラがたくさん増えます。
私自身覚えきれないかも。

バーレルは出番なし。

《おっとり捜査》 第1話

・ゴーン ゴーン

「…………ん…」

鐘楼の鐘の音が聞こえる。

朝7時の鐘だ。

寝ぼけ眼をこすって、あくびをする。

ここは、^{ヘックス}軍事拠点の宿舎、その中の私ことイエンの自室だ。

《サーバント》の隊員には1人一部屋ずつ自室が与えられている。

トイレ・洗面所はあるけど、キッチン・バスルームはなし。

キッチンは一階の食堂、バスルームは大浴場がそれぞれ共同となっている。

「…………ねむ…」

正直なところ二度寝したいが、朝食の時間を逃すわけにはいかない。魅力的な身体は、日々の健康な食生活により作られるものだ。先輩方は語っていた。

気怠い体を起こし、寝間着を脱ぎ捨てる。

朝食のため食堂へ行くだけだから、Tシャツにジャージでいいや。

寝ぐせを直して、顔を洗い、食堂へ向かう。

・パタン

「おはよう。」

「おはよーイエンちゃん。」

「おはよーございます。」

宿舎女子棟の廊下に出たところで、2人の先輩に会ったので軽くあいさつした。

「食堂に行くんだろ？一緒に行こうか。」

「はい。」

2人の先輩の間に挟まれて、食堂へ向かい歩き出す。
2人とも私より背が高いので、私が余計に小さく見える。

「イエンは今日からまた新しい任務で出張か？」

「んーと、任務の内容はまだ聞いてないんで、出張かどうかはわか

「んないです。」

話しかけてきたのは、トモエ先輩。
髪は赤茶色のストレートなロングで、クールビューティーって雰囲気だ。

あだ名は《モエモエ》らしいが、本人的には不本意とのこと。

「イエンちゃんも私たちと一緒に首都警備になればいいのにねー。」

この軽いノリの人は、リリカ先輩。

茶髪をポニーテールでまとめており、色白の美人。

かなり派手な人という印象。

そしてほのかに…

「そしたらイエンちゃんとデートできるしねー。デート、デート！もう、イエンちゃん可愛いから！昨日ぺろぺろしたけど、全然足りない！今またぺろぺろしていい！？しちゃえっ！」

「朝からサカるな！」

暴走するリリカ先輩をトモエ先輩が制止する。
危険だ。

《お姉様》はもっとまともなリミッターがあるが、リリカ先輩はすぐに暴走するため、油断ができない。

昨日も正座中に抱きつかれてぺろぺろされたし。

…なぜ舐めたいのだろうか。

おいしいのかな？

「じゃあモエモエ！夜なら！夜ならサカって良いよね！よーし！イエンちゃん、今晚はちゃんと自室にいるんだよ！？わかったね！？」

「モエモエじゃねえし！夜でもダメだ！そもそも後輩に手を出すんじゃない！」

「…後輩がダメなら、今晚はトモエの部屋に行こうかな…？」

「…え…？」

顔を赤らめるトモエ先輩。

こんな先輩方はもう置いていこう。

「先に行ってますね。」

「あん、クールなイエンちゃんも可愛い！でも置いてかないでー！」

〈おっとり捜査〉第2話

「…諜報員探し、ですか？」

「別に探すことが目的じゃないよ？始末しといて。」

キツネのような顔をしたカノン代行は、例のごとく重い話を軽い調子で話すので、こちらの調子が酷く狂う。

話は少し遡って。

ここは、《ヘックス》一階の隊員食堂。

《ヘックス》内への部外者の出入りは完全に禁止されており、外部から食堂業者を雇うこともできない。

つまるところ、この大きな隊員食堂で料理を作っているのは、私と同じ《サーバント》隊員だ。

《サーバント》第8部隊、通称《補給部隊》により、全隊員の日々の食事が作られている。

2人の先輩に挟まれて朝食を採っていると、突然目の前にキツネ顔の人が座った。

「おはよう姦しい三人娘さん。ちょっと真ん中の純朴少女に用があるんで、お時間いい？」

「純ボク処女！？イエンちゃんにセクハラですか代行！」

「セクハラはお前だ！おはようございます代行。」

「おはようございます代行。新しい任務ですか？」

リリカ先輩へトモ工先輩がつっこみを入れてるのを横目に、代行にあいさつする。

…こんなところで任務の話とか、TPOとか考える気ないんだな！。

「うん、そーそー。まあ今回は簡単な話なんだよね。一週間前の《スタグ》軍出兵の話と関係してくるんだけど。」

…この間の任務…。
何かやらかしたっけ？

「この間の任務では君とバーレルは随分と活躍してくれたみたいだね。それも《サーバント》隊員だったことも隠そうとせず。お陰様で2人は大陸で超有名になって、首都^{カンカ}には今、君たちに会いたいてファンがたくさん来てるらしいんだよ。」

……………言い方が遠回し過ぎていまいちピンと来ない。
えーと、つまり…

「まあ要はそのファンたちは各国の諜報員で、現在の《サーバント》の实情を把握しようと《カンカ》に潜伏してるらしいんだよ。」

.....

そして話は冒頭に戻る。

諜報員がいるから見つけ出して殺せと。

「他に情報はあるんですか？」

「ないよ？後は自分で探してね。まあ君は《黒髪》を隠さなければ目立つから、テキストにぶらついていればそいつらから近づいてくると思うよ。」

好き勝手なことを好き放題言ってくれる。
要は今回の任務は…

？おとり捜査

？近づく諜報員を始末

といったところか。

…ゴールが見えない。

それどころか行き当たりばったりで上手くいくものなのか。
この任務、何か違和感が…

-ギーン！

突如、私と代行の間に包丁が降ってきた。

包丁はテーブルに突き刺さるところか、信じられない勢いで貫通していった。

包丁の出所は、代行が座る席の右後方3m。

スキンヘッドにエプロンの、見るからに屈強そうな料理人がそこにいた。

〈おっとり捜査〉 第3話

スキンヘッドの料理人は、ドストスと大きな足音をたてて、代行へ近づく。

対して代行はゆっくりと席を立った。

「やあ、シユウさん。おはようございます。そんな怖いして、何かありました?」

「: オレ様の食堂で物騒な話をしてくれやがって、飯がマズくなるだろうが:。」

「いやー、聞き間違えじゃないですかねー。」

ものすごいスピードで後ずさりする代行。
だがそんな代行の首根っこを瞬時に捕まえるシユウさん。

「クソガキが、営業妨害だ! 出てけオラ!」
「営業じゃないでしょう! イェンさん! 任務はよろしくねっ! たのん…」

・ボツ!

全てを言い切る前に、代行は出入口から流星のごとく飛んでいった。

代行を投げ飛ばしたのは、《補給部隊》隊長のシユウさん。

食堂の最高責任者で、神懸かった調理技術とお袋の味を併せ持つ大陸最高峰の料理人。

赤銅色の肌にスキンヘッド。

2mを軽く超える身長に、筋肉の鎧。

タンクトップにエプロン姿。

エプロンには刺繍で、『弱肉強食』と書かれているが、あいにく私は『カンジ』を読めない。

本来なら、《サーバント》の一部隊長が総司令代行を投げ飛ばすなど有り得ない。

しかし、シユウさんは20年前まで続いていた独立戦争の英雄で、《万物是食材》の異名を持つ。

終戦間際に入隊してきた代行の権威に従う気はさらさらないらしい。

「おう、お前たち。」

「……はい！」「……」

あっけにとられていると、シユウさんが私たちに話しかけてきた。

お、怒られる…？

私の腰回りより太そうな腕を使って、投げ飛ばされる…？

「腹一杯食って、今日も仕事頑張れよ！」

ニカツという効果音が聞こえそうなほどの笑顔を見せ、厨房に戻っていった。

朝食を終え、自室に戻り、外出のための準備をする。

：代行は、《黒髪》を晒せばと言っていたが、《黒髪》を晒すとあまりにも目立ち過ぎる。

ここは普段通りニット帽にしよう。

浅めに被れば、その筋の人間なら気づくよね。

《ヘックス》の敷地内にいる間は、特に《黒髪》を隠すことはしていない。

入隊の時に《黒髪》であることはみんなにバレてるし、特に気にするような人もいなかった。

どうやら《サーバント》には以前も《黒髪》の男性隊員がいたらしく、初めて見る者ばかりではないと代行が語っていた。

任務のため外出、というより休みの日に買い物に行くような格好になっちゃったが、念の為背中に小太刀を忍ばせる。

準備完了。

やる気はないけど、これも任務だし、お給料もらってるんだから働かないと。

でもめんどくさい。

変な任務だし。

「…はあ…」

ため息をつきながら自室を出ると、廊下に1人の先輩が立っていた。

〈おっとり捜査〉第4話

- 《レート》カンガ首都。

《レート》最大の都市にして、大陸有数の交易都市。
通称《商都》と呼ばれるこの都市は、大陸中のありとあらゆる品物
が取り引きされている。

また、カップルや夫婦向けの観光地としても有名で、数多くのデー
トスポットがある。

多くの行商人や旅人が行き交うこの都市で、いくつもの出会いと別
れがあつただろう。

一瞬で燃え上がった恋の炎は、やがて2人の仲を焼き…

「…マジもー帰ってもらっていいですか？」

「つれない！イエンちゃんほんとつれない！せつつかくこんな美人
のお姉さんとデートしてるのに！でもそんなつれない態度をとられ
ると、逆にドキドキするっていうか…」

「デートスポットがどーとか、恋の炎がどーとか、突然何言ってる
ですか？あとクネクネしないで下さいキモいんで。」

「…ハア…ハア……んう……」

「ハアハアもしないで！」

帰りたいたい帰りたい。
一刻も早く任務を終わらせて帰りたい。
このうざいリリカ先輩の相手をするのがツライ。

以下、回想。

「おっ、イエンちゃん！ほんともうすごい待ったよ！普段はシヨ…
男の子みたいなきななのに、身だしなみとかに時間かけるのはやっ
ぱりソフトウエアがおにゃのこっつい…痛っ！ちよ、蹴らないで！
ハイとミドルとローに蹴り分けないで！あ…でもこの位の痛さが、
む…しろ、気持ち、…ん、いい……あれ？止めちゃうの？まあい
つか、また今度してね。いやまたそれは置いといて！市内に出るん
でしょ！？私も一緒に行つてあげる！大丈夫！代行には話を通して
あるから！拒否は却下！代行から同行するよう命令されてるから！
よし行こうすぐ行こう今すぐ行こう！《お姉様》に挨拶して直ちに
デートに行きましょうー！」

以上、回想終了。

なんかもう、めんどくさい。
突っ込む気にもならない。

…早くどっかの諜報員出てこないかな！。

瞬時に両膝と股間を蹴りつぶしてやるのに。

けしてストレス発散目的でないです。
逃亡防止のためです。

「ねーイエンちゃん！」

「嫌です。」

「まだ何も言っていないよ。」

「……なんですか？」

「ペロペロしていい？」

「嫌です！」

「先つちよだけ！先つちよだけだから！」

「嫌です！嫌！嫌！来ないでよっ！」

・ヒュッ！ガゴオオンッ！！

「そんな蹴り、ラブパワーで当たらない！」

「クリティカルヒットしましたよ！」

「私にとってはむしろご褒美。体力回復する。」

「私の方が精神的ダメージがひどい……。」

こんなやりとりをひたすら続けてまーす。

天下の往来で散々目立ってまーす。

お陰様で諜報員なんて近寄ってこないでしょーね。

帰りたい。

「ねえ、イエ恩ちゃん？」

「……………」

「イエ恩ちゃん？」

「……………」

「……………」

「……………」

「みみかぶ」

「ひゃん！」

「はは！『ひゃん！』だって！イエンちゃんかわいい！」

「……………」

「まあ、それはちょっと置いて。…プロ臭いお兄さんがイエンちゃんの「とチヲ見してゐるよっ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8486x/>

戦乱ブラック官庁

2011年10月26日13時02分発行